

Honderich, Ted. *A Theory of Determinism*. 1988.

島 本 篤

1. はじめに

自由や責任概念に関連した哲学上における主要な論争は、現代において「自由意志論争 (the free will debate)」として知られる。この論争は長らく「自由と決定論 (freedom and determinism)」という枠組みで扱われてきた。というのも、決定論という考え方や理論が自由という概念と衝突しようと考えられ、かつそれが (例えば神学的、物理学的側面等から) 無視することのできない問題を孕んでいたためである。そのため決定論、及び自由という概念の解明が求められ、それらが成立しうるか、あるいは自由 (ないし責任) が決定論と両立するか否か、逆に決定論と両立する自由の概念はありうるかが問われてきた。こうした問題の枠組みが決定論及び非決定論 (indeterminism) という捉え方へと変わったのは、(それ以前から非決定論的な議論は存在していたとはいえ) 量子論 (Quantum Theory) の登場によるところが大きい。さらに、より近年 (とりわけ2000年前後以降) では、「決定論及び非決定論のいずれが真であったとしても」妥当となる議論を求めるか、あるいは別の方向性の議論——運 (luck) や論証手続きによる議論、神経科学を始めとした諸科学等——に重点を求める傾向にあり、決定論、そして非決定論/量子論の理論的解明や解釈に議論の幅を割くことはなくなってきたように思われる。

しかし、それが可能となったのは、「決定論」という理論に対し一つの大きな貢献があったためであろう。その貢献を果たしたのが、ホンデリックによる本書、*A Theory of Determinism: The Mind, Neuroscience, and Life-Hopes*. 1988.——その題名は (ロールズの主著の翻訳に則るなら) まさに『決定論』/あるいは『決定論に関するある理論』——である。実際、他の自由意志論に関する洋書文献において、決定論の理論が扱われる際には本書が参照される。

本書は644頁にわたる大著であり、十章構成、三

部に分かれている (一―四章がPart 1、五―六章がPart 2、七―十章がPart 3)。なお、本書は後、*Mind and Brain: A Theory of Determinism Vol. 1*. 1990a., *The Consequence of Determinism: A Theory of Determinism Vol. 2*. 1990b.として分冊の上ペーパーバック版で出され、前者はPart 1及びPart 2 (一―六章)、後者はPart 3 (七―十章) が収められている (なお、他の書において、この分冊の書誌情報として1988a/1988bと書かれていることがある)。ペーパーバック版は1988年版と比較し、分冊に際しIntroductionが部分的に分割されかつ加筆が入っており、また全体を通して部分的に挿入が加えられる/表現の変更が行われるなど修正が入っているものの、内容的にはほとんど同じであると言っている。

決定論の理論に言及する際、本書が参照されるのは、その分量もさることながら、それまでは決定論に対し次のような批判があったからである。例えばP. F. ストロウソンはこう言っている。「私がこれらの立場のうちどれに属するかを問われれば、私は第一の立場、すなわち決定論というテーゼが何であるか知らない者たちの立場に属すると言わねばならない」(Strawson, P. F. "Freedom and Resentment." 1962: 187)。こうした「明確かつ明白、一貫性があり、完全で、概念的に満足のいく形で決定論という理論を提示することはできない」という批判に対し、本書はそれが可能だと示したのである。「.....我々の存在について、概念的に満足のいく決定論的理論はあるのか? この世紀の後半において、そしておそらくはそれ以前から、そのような理論は存在しないと返答されてきたし、またおそらくはそう考えられてきた。本書は、それが存在するという答えを提示する」(1988: 1, 1990a: 1)。もちろん、量子論によって決定論が否定されたという見解に対する応答もその意図に含まれている。こうした背景から、決定論の理論を扱う際には本書が言及される。

他方、日本に目を向けると事情が事になっている。というのも、ホンデリックによる *How Free Are*

You?: The Determinism Problem. 1993. (Second Editonは2002年)の松田克進による翻訳があり、この*How Free Are You?*が*A Theory of Determinism*. 1988.の一般向けに書かれた書であること、そのため章立ての大枠、議論の要点においては1988.と、ある程度同様であること——「本書の各章は、私の専門的かつ学術的、そしてはるかに長大な*A Theory of Determinism*.における同番号の各章と、同じ主題を扱っている」(1993: 131)——そのため、これらの本において日本で参照されることの多い議論(Part 3における態度に関する議論)を扱う上で、少なくともその要点を捉える分には1993.版で果たされうること(ホンデリック自身、1993 (2002).版は1988.の要約だと述べている(2002: 6-7))、また*A Theory of Determinism*.が600頁を超える大著であることから、日本においてホンデリックの自由意志論に関する著作が参照される際、もっぱら*How Free Are You?*が参照される。

しかし、自由や決定論に関わる著書の中で、ホンデリックの主著はあくまで*A Theory of Determinism*.であり、対する*How Free Are You?*は一般向けであるがゆえに、参考文献のリストもない。それゆえ議論における出典の参照もない。「この本は、ある重要な問題と議論への入門書であり……一般の読者を対象としている。……何よりもまずは、この本は哲学を急ぐ学生のためのものである」(2002: 6)。1993.と1988.とでは、一つの議論に割く分量と質が違うために、それぞれ単体で見た際、議論の十全性/多角的検討や妥当性には当然、大幅な差が生じる——1993.はあくまで1988.の要約なのだから。

そうした背景もあり、たまたま執筆者の手元にあった自由意志論にかかわる洋書の研究書(論文集は除く)のうち、ホンデリックによる上記の本(1988. 1993(2002). 1990a/b)のいずれかを参考文献に載せていて、かつ1993年以降出版のものは22冊が該当し、そのうち、1988.ないし1990a/b.のいずれかのみのもが14冊、1988.ないし1990a/b.のいずれかかつ1993(2002).の双方を載せているものが7冊、1993(2002).のみを載せているものが1冊という結果となっている。すなわち、海外の研究ではもっぱら、*A Theory of Determinism*.が参照されている。自由や責任に関する論考の土台とするならばともかく、研究する上では、本書ではなく1993.を扱うのみでは、不十分とならざるを得ないだろう。

冒頭で述べた通り、近年においては決定論の理論的解明や解釈は行われなくなっている。一方で、決定論の理論を素通りして自由や責任概念を語るのは、空虚とならざるを得ない——なぜなら、決定論の理論自体はいまだに有効であり、かつ有効であり続けてきたからである(だからこそ、「決定論/非決定論のいずれが真であっても」という前提が取られる)。自由や責任概念に完全に独立した意味を持たせるのでない限り、言い換えれば、民間で用いられている自由や責任概念と幾分なりとも共通項を見出そうとするのであれば、いずれの学問にせよ、自由や責任概念を語る上で決定論の理論、すなわち本書を踏まえないことは、問題の核心に触れないまま議論をしているに等しい——少なくとも教育学は、そうした議論の仕方を行ってきた(執筆者が明らかにしたように、教育学において扱われてきた自由もまた、自由意志論における議論や自由の問題と関連せざるを得ない(島本 2024))。決定論の理論的アプローチの検討という大きな課題を我々が担う必要がないのは、本書(を始めとした諸研究)が明らかにしてきたものがあるから、というだけのことである。

そのため、現代においてなお、本書の再読には意義があり続けている。

2. 各章について

三部はそれぞれ、Part 1: 決定論という理論の提出、Part 2: 本書で提出された決定論の理論的真理性の問題(本書の決定論は諸観点から十分に支持されうるものか)、Part 3: 帰結の問題(決定論の理論は我々に何をもたらすか)によって構成される。

全体に渡って*How Free Are You?*との差異を述べるならば、従来の議論や理論、先行研究について、論理学的手法や当時における神経科学や量子論等の諸学の知見を踏まえた上での詳細な検討とそれらへの批判と応答、概念に関する多角的な分析といった要素が挙げられる。例えば一章では、とりわけ因果関係に関連したのものも含めた条件文(conditional)の丁寧な分析が、論理学的操作も踏まえつつ行われる(「従属法則的条件文(dependent nomic conditionals)」及び「独立法則的条件文(independent nomic conditionals)」の分析(14)等)。紙幅の関係もあるため、本書や当の決定論に関する詳細は直に原著を確認していただくこと

としたい。

第一部（必然的結びつきと三つの仮説（Necessary Connections and Three Hypotheses））は、「明白で、完全で、そして適切な水準の具体性を備えた決定論の理論」（1988: 3, 1990a: 3, 1990b: 6）を提示することを目的とする。そのために、心と行為の哲学を提示する必要がある、それはすなわち、神経の出来事と心的出来事との関係、その双方の生じ方、そして行為の性質を扱うことを意味する。それらが二章「心-神経的法則的相関（Psychoneural Nomic Correlation）」、三章「心-神経的対の因果（The Causation of Psychoneural Pairs）」、四章「行為の因果（The Causation of Actions）」に該当する。一方、それらの問題に先行するより一般的な問題があり、それが必然的、あるいは法則的結びつきの問題である（一章「必然的結びつき（Necessary Connections）」）。というのも、決定論も含め、いずれの問題も、ある出来事と出来事との関係、とりわけそれが必然的に生じる関係か否か、それと類似した関係か否か——すなわち、原因と結果の関係が重要となるからである。そのため一章では、「原因」と「結果」、「因果的状況（causal circumstance）」に関する特徴について「従属法則的条件文」、「独立法則的条件文」の区別を導入しつつ、九つの命題を踏まえて扱われ、それと類似した法則的結びつきとの区別、科学、常識、確率論との関係等が考察される。その上で、二章は主に、「心的出来事（mental events）」と「神経的出来事（neural events）」との関係に関し、「心-神経法則的相関仮説」の提出とその反論への応答を行っている。行動主義、因果主義、機能主義等の検討を踏まえた「意識（conscious）」とは何かの考察に始まり、心的实在論（Mental Realism）の提示、同一説（Identity Theories）の批判的検討と心-神経が法則的関係にあるという仮説の検討、それに対する複数の反論（心的出来事や言語学、ヴィトゲンシュタインの『断片』を端とする反論等）の検証を行う。三章は二章の議論を引き継ぎつつ、「心的出来事の説明とその生じ方」を示すため、因果的相互作用論やマクロ-ミクロ関係論等いくつかの理論を検討し、「心-神経対の因果仮説」を提出する。これと相関仮説を合わせ、「結合理論（The Union Theory）」を心-神経関係への解答とする。それから「心の非決定論」の問題を、決断／決定の生じ方に関する説明や起源者（Originator）、起

源者と心的出来事の関係等といった観点から明らかにする。四章では行為に関する議論、すなわち行為論に焦点が当てられる。行為に関する理論や見解、例えば新行動主義（Neo-Behaviourism）や行為の複合的見解・二重側面的見解（The Compound and Dual-Aspect views of action）等の検討、あるいは意志や欲求、信念等の重要な心的用語の分析等も行われるが、より主要となるのは意図の分析、能動的意図（active intentions）と非能動的意図（inactive intentions）、心的出来事と行為との関係であり、それらの考察から「行為の因果仮説」が提出される。以上を踏まえ、原因と結果の関係及び、三つの仮説に対する結論を経、「決定論の理論」を提出する。

第二部（理論の真理（The Truth of the Theory））では、第一部で提示された「決定論の理論」が十分に根拠づけられているか——すなわちその真理性を確認するために、五章「神経科学と量子論（Neuroscience and Quantum Theory）」にて、第一部における三つの仮説それぞれに対する（量子論や、脳の構造を始めとした神経科学的知見までも含んだ）当時の時点での科学的根拠づけが行われる。また、ここまでで検討してきた決定論が真であるならば、人間の未来は予測可能であることが帰結しうる。その予測可能性は知識にも関係する。この問題に関し、六章「予測と知識（Prediction and Knowledge）」にて、従来、行われてきた問題提起——決定論との関係における予測可能性や選択、自己性、ゲーデル文、知識等に関わる問題を検討する。

この第一部、第二部を通して、決定論は、確立されたもの、すなわち真として受け取ることとはできないが偽であると立証することもできず、それ以上に「決定論の理論は非常に強く支持されており、心的でない世界に関する非決定論の一般的理論と少なくとも同程度に支持されているだけでなく、心に関する非決定論の理論よりもはるかに優れている」（1988: 374, 1990a: 374）とホンデリックは結論づける。

第三部（決定論の帰結（The Consequence of Determinism））では、決定論が真であるならば、いかなる帰結が生じるのかという問題——すなわち、「決定論が真であるとして、あるいは決定論が真であるならば、我々の人生をどう捉えるべきか」（1988: 2, 1990a: 8, 1990b: 1）に対し、従来の二つの立場の双方が誤っていると結論づけることで問題の解決を試み

る。七章「二つの態度の系列、狼狽と頑強 (Two Families of Attitudes, and Dismay and Intransigence)」にて、決定論によって影響を受けうる「人生の希望 (life-hopes)」等の七つの観点と、行為あるいは自由の二つの捉え方 (自発性 (voluntariness) と起源性 (origination))、その双方に対して我々が取りうる二つの態度が扱われる (七つの観点——人生の希望、個人的感情、知識、道徳的責任、正しい行為、道徳的地位、社会制度-実践-習慣——のうち、最後の社会制度-実践-習慣に関しては十章にて扱われる)。八章では従来の二つの立場、「両立論と非両立論 (Compatibilism and Incompatibilism)」について、アリストテレス以降のそれぞれの論者の主張と双方の立場に対する評価——例えば、どちらの立場も一方の行為の捉え方のみが正しいとしてきた点で誤ってきた等——が扱われ、双方の立場が誤っていることが示され、九章ではホンデリックの解決、「肯定 (Affirmation)」という態度が扱われる。従来の双方の立場からは、我々が矛盾と不整合性、葛藤に陥ることが帰結し、「肯定」という態度はそれらを乗り越えることを含んでいる。この第三部における七-九章の議論は、日本において「態度の議論」として1993.版から最も多く言及される議論であろう (海外においてもこの議論が参照されるものの、本書評「はじめに」で述べた理由から、六章までの「決定論」の理論的側面の概念的妥当性と真理性もまた頻繁に言及される)。最後に、十章「罰、社会、政治 (Punishment, Society, Politics)」に関する問題が扱われる。

3. おわりに

本稿一章 (「はじめに」) では、本書、*A Theory of Determinism*. を踏まえずに自由や責任概念を語るものの云々について書き残した。一方、執筆者自身としては、哲学する上で、哲学者であり続ける上で、あるいは何事かを深く思考する上で、また後世に残る論考を行う上で、優れた理論を構築する上で、哲学書や研究書は必須ではない——むしろ、時には有害でさえありうると考えている。そのため、「原著主義」 (という言葉があるのか不明だが) には抗したいと思うところがある。「哲学」——*philosophia* において、哲学書や研究書はあくまで、思考し、探求する上での手段でしかないはずである。

他方で、研究するとなった場合には話が異なってくる (その曖昧になる領域が、概念に対する学問、すなわち「哲学『研究』」であるのだが)。

とはいえ現実的に、ネイティブでない者が600頁を超えた洋書、かつ論理学、神経科学や脳科学、行為論、量子論等、各分野の専門知識を踏まえた本書を読むのは苦勞のいるところである。その要点が詰まった1993.版が翻訳されているのだからなおのこと、日本において1988.に目が向けられなかったのも致し方ない側面もあるう。

しかし、それでもなお、この書評の指摘を踏まえれば、研究において自由や責任概念を論じる上で、哲学はもちろん、教育学や他諸学においても、本書を再読する必要性は明確であろう。何より、本書は決定論という長い歴史を持つ理論の一つの集大成である。それが決定論のすべてではないとは言え——例えば神学的決定論、論理学的決定論を主題にしてはいない。だからこそ“A Theory of”なのだが——、現代でも通用しうる因果的決定論について、本書以上のものは「はじめに」で述べた理由から見出されない。

最後に、ホンデリック教授は2024年10月に亡くなった。享年91歳である。本書がいずれ翻訳されること、あるいは翻訳・出版の道を辿ることを切に願ひ、本稿がそのささやかな貢献を果たしうることを望み、筆を終える。